

部を擁し、理工学部としては六学系十学科を擁する我国有数の総合大学と大学院に成長し、確固たる社会的評価を得るに至ったことは筆舌に尽くし難い感慨を覚えます。これもひとえに、学園関係者の努力もさることながら、二十万人校友をはじめ社会各層の皆様のご支援の賜と感謝致しております。上記のとおり、一九三八年の「立命館高等工科学校」の設立を理工学部の起源とすれば、来年は理工学部創立六十周年にあたり、人間で云えば「還暦」を迎えることとなります。この機にあたり理工学部では記念事業が企画されるとともに、各学系ごとの同窓組織が相互に連携した学部レベルの連絡協議会の結成準備が進捗しているように伺っています。誠に時宜を得た企画であり、当方としても全幅の協力をさせて頂きたいと存じます。

本学では、さらに来春に「経済学部」・「経営学部」をBKCへ移転し、「理工学部」とともに三学部で文理融合型のインテリジェント・キャンパスとして新展開をはかります。また、二千年には大分県別府市に新大学「立命館アジア太平洋大学（仮称）」を開学することになりました。新大学は「アジア太平洋学部」と「国際マネジメント学部」の二学部構成とする計画であり、各々定員四百名、全学で当面三千二百名規模の大学を創設することになります。本計画は別府市や大分県の絶大なご支援を得て策定されましたが、今後も引続いてアジア太平洋地域の多くの国々、文部省をはじめ関係省庁、産業界、さらに校友の皆様など、幅広い関係者各位の深いご理解とご支援を仰いで参りたいと考えております。この場をお借りして、機友会会員の皆様にもこのような母校の新たな挑戦と飛躍に対して、ひき続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。なお、私は総長・学長に就任して

早や七年が経過いたしました。任期はあと一年余を残すのみとなりました。想えば、母校発展の高揚期にあつて皆様からの多大なご支援を頂きましたことに対して深甚なる謝意を表すものです。今後とも引継いでお力添え賜りますようお願い申し上げます。末筆ながら、機友会会員の皆様方の益々のご健勝とご清栄をお祈り申し上げますとともに、貴会の一層のご隆盛をお祈り申し上げます。

支部だより

楽しく力強い
「びわこ機友会ニュース」の発行
滋賀県支部長 山田元助

平成四年九月六日、滋賀支部(愛称・びわこ機友会)設立以来、当支部は着々として基礎固めに努力中ですが、その役割の一端を果たす要素の一つに「びわこ機友会ニュース」の発行があります。当支部の総会は原則として隔年に行われますが、総会が開かれないうちに、その間のコミュニケーションをはかるために、十一月に発行されます。「ハンド、メイド」のささやかなものですが、毎回改良を加え、お陰様で軌道に乗って参りました。本年十一月に第三号を発行しましたが、第一号からの経過をたどりま

す、
第一号は(平成五年)は
①立命館日満高等工科学校の記録
②びわこ・くさつキャンパス建設の歩み

③躍進する滋賀県の「全国ベスト五」

の内容で、BKC建設にわく当時に、理工学部の起源に思いを致し、又地元の滋賀県が全国に占めている位置づけを再認識する将来活動の基礎固めでもありました。第二号(平成七年)は当支部設立以来の経過を中心とし

記録
①びわこ機友会「力強い第一歩」

②BKCの産学活動開始

の「ニュース」に重点をおきました。今年(平成九年)発行の第三号は、昨年の第三回総会の経過を説明すると共に、その時の安西青郎先生(国際関係学部)の「超常現象を科学する」の講演資料を掲載させて頂きました。更に大イベントとして注目され、多大の成果があった立命館ノーベル・フォーラム「二十一世紀のアジアの科学における夢と希望」の講演者、LEHN教授(ルイ・パスツール大学)一九八七年ノーベル化学賞受賞、LEE教授(台湾中央研究院院長)一九八六年ノーベル化学賞受賞及び大南総長の三氏の紹介を掲載させて頂きました。

更に産学協同や新研究施設の中核の一つである新しく出来た「SRセンター」や母校の第五次長期計画の進展状況を取り上げ、又地元との動きとして、草津ロータリークラブからBKCに、桜並木の「通り抜け」用にと七年生の桜を九十五本頂いた事などをお知らせしました。

第三号(平成九年)を要約しますと
①びわこ機友会の記録
②充実を発展を続けるBKC
③第五次長期計画と
BKCの新展開

となり。幸い隔年に開催される機友会を当支部の総会開催が異なっていますので、何れかの総会で、毎年機友会の皆さんと交流が出来ることは嬉しい事です。

これらを通じて、機友会滋賀支部旗の下、地元にもふさわしい、楽しく力強い「びわこ機友会」に致したく、みなさまのあたためたいご指導やご鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

立命館大学機友会

中国支部設立される

庶務幹事 千葉利晃
(昭和四十二年卒)

会員相互の生活の発展、互恵、親睦ならびに立命館大学機友会本部との連携をはかりつつ、母校の発展を期すことを目的として、立命館大学機友会「中国支部」が平成九年九月六日に設立された。鳥取県、島根県、岡山県、広島県および山口県の中国五県の機友会支部である。滝澤忠義(滝澤鉄工所社長、昭和二十年卒)支部長以下、各県に一名の副支部長(五名)、庶務幹事三名、会計幹事二名、監査三名の合計十四人の役員体制でスタートした第九番目の支部になる。総会員数約三百五十人のこの新しい中国支部へ、暖かいご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

以下、当支部設立までの経過と小生の雑感を記して、中国支部誕生の報告と致します。

平成九年六月七日に第一回の設立準備委員会倉敷市の倉敷芸文館で開催した。第二回の設立準備委員会は七月六日に倉敷ターミナルホテルで開催している。ご多忙中にもかかわらず



ならず、両準備委員会とも、島田機友会会長と酒井教授には遠路ご出席頂いている。酒井教授には、開催案内から中国支部の会則案作成まで総てにご尽力頂いたおかげで、万事スムーズに支部設立の準備をすることができた。

設立総会(倉敷ターミナルホテル)は、大南総長、島田機友会会長、酒井教授の来賓を得て開催した。大南総長には

「世界のなかの立命館、
Ritsumeikanを指して」と題して記念講演をして頂いた。立命館大学の現状が理解できるとともに、壮大な立命館大学の将来像を聞かせて頂き、卒業生の一人として、心強く感じた次第である。

大南総長の話は、立命館大学の現状

と将来構想ではあったが、立命館大学を我々個人に置き換えることもでき、我々がどのように生きるべきかを語られており、非常に有意義であった。出席者が少なかったのは残念であったが、今後、会員と母校のため、当支部の活動を活発にし、支部設立の目的を達成しなければならぬ責任を痛感しています。

設立総会の後、できたばかりのチボリ公園内のレストラン「ウォータミール」で、デンマーク料理を楽しみながら懇親会を開いた。この懇親会には、大南総長、島田機友会会長、酒井教授にも出席して頂き、望外の喜びであった。平井氏（昭和四十二年卒）の名司会のもと、諸先輩の昔話に花が咲き、たまたま家族で来られていた他の校友の飛び入りもあり、非常に楽しい懇親会であった。

最後になりましたが、中国支部が無事設立できたのも、記念講演をして頂いた大南総長はじめ、島田機友会会長および酒井教授のご尽力の賜物である。ここに記して感謝の意を表するとともに、皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

会員だより

第二次世界大戦と私達

忘れられない思い出

昭和二十一年卒 大泉進一

昭和十六年三月私達航空発動科（委託生二十五名）の内十五名は満州飛行機製造株式会社に就職する事になり赴任の段取りを皆で相談して決め、乗船乗車券の一括購入を卒業式

に総代で出席する石田骨郎君（明石出身）に頼み、地方出身者は卒業試験が終了すると準備の為一斉に帰郷しました。この間に、学校に会社から連絡があり、予定の一週間前の乗船を指定され神戸港集合日時を指示されたので石田君も苦勞したので、当日集合する者は我々以外すべて中等学校卒業生のみで、人事課員に引率されての赴任でした。これが差別の第一歩でした。会社は階級がはっきり差別されていた。職員（胸章は三本筋・準職員（二本筋）・雇員（一本筋）・庸員・工具筋無し）に分かれ、専門学校卒は準職員、私達は雇員で机・椅子も異なるし、勿論給料も差が付いて居ました。寮も別々で大変傷つきました。

入社当初は工場実習で各現場を一ヶ月余りかけて回りましたが、その間に徴兵検査があり、甲種と第一乙種合格者は兵役につき、兵役に取れない者は特殊技術者として徴集なしの暗黙の決まりがあり、この内私を含む七名が兵役組になったのです。検査の終わった時点で新入社員の新属部署が決まったのですが、今待遇改善を果たさなければ後輩や残る者はどうなるのか、（大げさな言い方ですが）死んでも死にきれないの思いで、運動に取り組みました。先ずは上記の様子を学校宛に手紙しました。その返事のつもりか石田君のところに「資料」が送られて来ました。次に皆につれだつて人事部長自宅に伺い、趣旨を説明善処をお願いしました。同時に此の学校当局の返信内容では不安で、改めて本野校長に詳しく事情を訴えました。ところが本野校長より書翰を頂き、待遇改善の要求書も送られて来ました。この要求書の内容には、私達が訴えた状況が十分取り入れられていて、後は時を待ただけと思えました。本野先生の誠意あるお人柄に感じいりました。八月に入って、満州鉱工技術協会関口八重吉理事長より御回答の文

書頂きました。九月下旬、倉橋理事来満するとの報に、奉天各社に就職している日滿高工卒業生を探して（全員の名簿が無かった）設置してこれを迎えました。それから十月一日、突如昇格の辞令を受け、胸章も筋二本になりました。早速本野先生に電報で報告しました所、先生から即日お祝いとお励みの返電を頂きました。

私共日滿高工満州国委託生第一回生は昭和十四年三月になって突然入学試験の全国募集で試験場も数カ所で行われ、集まった生徒は、機械科・電気科は等持院で、航空発動機科・自動車工学科・応用化学科・建設科は出町の寮で起居しました。寮生自身が起床・点呼等々規律を作り、校風を創造しながらの、時にストームやコンパで寮歌を歌ったりとそれは楽しい青春でした。授業は東京帝大と大阪帝大教授が加わって緊張した日々を送りました。

尚私を外地からの復員後、専門学校工学科機械科三年に編入学しました。現機友会会長の島田泰男氏はその時の学友です。

有意義な青春を過ごした我々航空科生は、時折開いたクラス会が隔年になり昨年から毎年夫婦同伴で行っています。来年は六月第一週に明石で行われます。こんな第一回生の学生生活や当時の社会情勢について、筆の走るままに文章化してみました。史実の一コマとして少しでも参考になれば誠に幸いに存じます。



〔資料〕

謹啓 時下新緑ノ候貴社愈々御隆昌ノ段奉慶賀候陳者先般來弊校第一回卒業生ノ就職ニ關シテハ種々御配慮相煩シ多數御採用下サレ御厚志感銘能アリ候就テハ貴社則チ遵奉シ國家ノタメ粉骨碎身致サシムベク候得共萬事未熟ノ者ニ之レ切望バ何卒御指導御鞭撻相成ル様切望仕リ候御承知ノ如ク弊校ハ滿州國産業開發ニ要スル高級技術員養成ノ目的ヲ以テ滿州國政府ノ懇囑ニヨリ設立セラレタル學校ニ之レ有リ中學校又ハ甲種工業高校卒業生ニ封シ滿二ヶ年ノ専門教育ヲ實施致シ居リ候即チ修業年限ハ二ヶ年ニ有之候得共委託生徒ハスベテ之ヲ寄宿舎ニ收容シテ大陸就職ノ豫備訓練ヲ施ス外暑中休暇等長期二日ル休暇ヲ全廢シ毎週授業時數ヲ四十八時間トシ且學科目ヲ整理按配シテ三ヶ年ノ課程ト同程度ノ課程ヲ修得セシメ居リ候

從ツテ卒業生ノ實力モ内地ニ於ケル同種ノ専門學校卒業生ニ比シテ決シテ遜色無キハ勿論其渡滿就職ノ心構ヘニ於テハ遙ニ之ヲ凌駕スルモノト確信致シ居ル次第ニ御座候唯厚生省ノ割當ニ於テ滿州國ノ便宜ノタメ「實業キップ」ト相成居リ候得共ソレハ飽クマテ封滿割當ノタメノ苦肉ノ策ニ之レ有リ候間其點何卒御高察賜リタク懇請ノ至リニ御座候右様ノ事情ニ有之候ハバ弊校卒業生御採用ノ向ニ於テ萬一實業學校卒業生同等ノ待遇ヲセラルルニ於テハ彼等ヨシテ徒ラニ不滿ノ懐カシメ終ニハ自暴自棄ニ陥入ラシムル傾レナシトセズ弊校トシテ最モ憂慮致シ居ル次第ニ御座候

何卒弊校設立ノ趣旨御諒察被下將來特別ノ御配慮賜リ度ク御願申上候右御挨拶旁々御願申上度ク此ノ如クニ御座候 敬具

昭和十六年五月十五日
立命館總長 中川小十郎
立命館日滿高等工科學校長 本野亨

教員だより

学科・学系のご紹介
理工学部機械システム学系長 鈴木恵

機友会会員の皆様、平素は本会の諸活動に對しまして種々ご支援を頂きました。誠にありがとうございます。また、本学の諸事業につきましても、常々幅広いお力添えを賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、「機友会ニュース」（第三号）の刊行にあたり、このたび機友会事務局より記事執筆のご依頼がありました。つきましては、創刊号ならびに第二号を再読したところ、まだ機械システム学系の紹介記事が掲載されていないように存じますので、この機会を利用して、立命館大理工学部機械システム学系の現状につきまして、紙面の都合上、簡潔にご紹介したいと思います。

現在、「機械工学科」は平成八年度に新設されました「ロボティクス学科」とともに「機械システム学系」を構成しています。カリキュラムでいいますと、機械工学科には「材料系列」、「エネルギーシステム系列」、「システム制御系列」、「設計生産工学系列」の四系統があり、ロボティクス学科には「ロボットのシステム系列」、「ロボット知能の三系統があります。在籍学生数は、機械工学科で六百二十五名（内四十八が女子学生）、ロボティクス学科で二百三十名（内二十一が女子学生）となっております。

一方、機械システム学系には総勢二十六名の専門科目担当教員がいます。以下に各教員の氏名と主な担当

す。以下に各教員の氏名と主な担当科目をご紹介させていただきます。

機械工学科・秋下貞夫(制御工学)、
鉛山恵(材料工学)、磯野吉正(機
械システム実験)、岩清水幸夫(振
動工学)、大上芳文(流体力学)、
小西聡(制御工学)、酒井達雄(機
械設計法)、坂根政男(材料工学)、
田中武司(機械工作法)、田中道七
(材料力学)、田畑修(工業力学)、
西脇一宇(熱機関)、野田義光(情
報処理演習)、山本憲隆(生体力
学)、吉原福全(燃焼工学)

ロボティクス学科・有本卓(符号理
論)、飯田健夫(情報処理)、石井
明(応用数学)、川村貞夫(制御工
学)、杉山進(電気電子回路)、手
嶋教之(福祉機械論)、永井清(口
ボット工学)、平井慎一(力学)、
前田浩一(制御工学)、牧川方昭
(バイオメカニクス)、渡部透(生
産システム)

本学理工学部(の起源は昭和十三年
に設立された「立命館高等工科学
校」であり、来年は理工学部創立六
十周年を迎えることになりました。戦
前・戦中・戦後の幾星霜を経て、大
学、学部、学科のいずれもそれぞれ
に名称や規模が変わるなど、大きな
曲折を繰り返しながら、いままさに
私学の雄として、世界の立命館とし
て、高い社会的評価を得るに至りま
したことは誠に感慨深く存じます。
このような本学の躍進を実現した
のは、多数の本学卒業生の物心両面
にわたる多面的なご支援によるもの
であり、学科・学系を代表して、こ
こに改めて厚くお礼申し上げます。
今後とも引き続き広
くご支援とご鞭撻を賜りますよう、
どうぞ宜しくお願い申し上げます。
最後に、お健勝とご活躍を心よ
りお祈り申し上げます。

事務局だより

機友会ニュース創刊号(平成七年
十一月二十六日発行)に昭和二十二
年ご卒業の同期会である「二十二機
会」の活動に関連して、「二十二機
会余話」が掲載されている。理工学
部草創期の思い出として当時を偲ぶ
小井実氏の貴重な記事が掲載されて
いるが、この記事に関連して本誌編
集事務局が「幻の衣笠寮寮歌」と題
する小文を掲載した。その趣旨を簡
潔に紹介すると、衣笠寮寮歌は大変
懐かしいがこの寮歌を歌える人物が
始どいなく、楽譜や歌詞の印刷物も
ないので全く忘れ去られたような状
況にあるが、ただ一人「二十二機
会」メンバーの小橋昇氏がこの寮歌
を明瞭に覚えておられるとのことだ
であった。したがって、これを保存す
るために小橋氏に実際に歌って頂い
て、音楽的素養のあるお方に採譜願
い書面として永久保存したいが、ど
なたかこの才能をお持ちの校友はい
ないだろうか?ということであった。
七千名を超える機械工学科の卒業
生は正に多士多才であり、本会副会
長の大金晋氏(昭和三十二年卒)が
この才能をお持ちで、ご多忙の中、
この極めて専門的で芸術的な作業を
お引き受け頂いた。平成九年十月二
十三日の夕刻に、衣笠寮寮歌を覚え
ておられる小橋昇氏と、大金副会長
さらに最初のキッカケをご提供頂い
た小井実氏の三名に立命館大学理工
学部キャンパスまでお越し頂き、機
械科事務室で実際に歌唱と採譜が行
われた。小橋氏が一番から四番まで
歌い終える間に大金氏は実に驚くべ
き才能を発揮され、五線譜にこの寮
歌を音符を用いてすべて記録された
のである。そして、できたての手書
き楽譜を見ながら直ちに自分

歌って、小橋氏から大変正確に採譜
されている旨のご確認を得た。
このような経緯により、幻の「衣
笠寮寮歌」は見事に楽譜として再現
され、万人に永久保存されたことは
事務局としても大変な慶びであり、
ご多忙の中この企画に積極的にご参
画頂いた上記三名の会員各位に対し
て、深甚なる謝意を表する次第であ
る。今後、色々な機会にこの寮歌が
歌われ、かつ愛されることを念願致
します。

立命館大学機友会事務局連絡先
〒五七五-八五七七
滋賀県草津市野路東一丁目一
立命館大学理工学部機械工学科内
電話 ○七七五六一-二六六二
FAX ○七七五六一-二六六三

一、 衣笠寮々歌
御室の桜爛漫と
京洛の人憧るる
春日再び回り来て
衣笠山の老松に
紫紺の雲がたなびけば
興亜の覚悟いや高し

二、 紫勾う黎明の
双ヶ丘の空高く
星座静かに瞬けば
朝道遥の若人が
希望の歌をうそぶきて
遠く亜細亜を想うかな

三、 秋暮れの露相々と
興亜の寮はたそがれて
興亡歴史や夢の跡
仁和の寺の塔高く
越路の雁の一群に
はるか故山を憶ふかな

四、 愛宕おろしの肌寒く
金閣室に夜は更けて
粉雪斜めに降りしきり
衣笠寮は寂として
埋火おこす学人の
真理探究の剣氷る

衣笠寮寮歌

おもろの さくら らんまん と
きーらく の ひと あたがーる
よんじん びつが また めぐりき
さぬが させーまの おいまつ に
しこんの くーもが たなびけ ば
こーあ の かーくご いや たか



(昭和三十二年卒)
小井実氏



(昭和二十二年卒)
小橋昇氏



(昭和二十二年卒)
大金晋氏